

第3回 新潮流の中の道内ものづくり産業戦略懇談会議事概要

日 時：平成22年5月21日（金）14：00～16：30

場 所：センチュリーロイヤルホテル 20階 白鳥の間

議事概要：「北海道においてもものづくりを行う優位性」を主要テーマとし、①「北海道の立地上の強み・弱み及び立地に係る要望と対応」

②「人材等に対する要望及び対応」について構成員との意見交換を実施。概ね以下の意見があった。

○北海道の立地上の強み・弱み及び立地に係る要望と対応

- ・進出当初（21年前）は室蘭も構造不況。また、日本全国の中でも「脱都会」ということで各地方に工場を出そうというような時代であり、横浜では人と場所という点で展望が出来ず、北海道へ進出。
- ・金型製作の企業としては日本でも大手になったが、それは、北海道での若年層大量採用が大きい。
- ・金型は今後一層縮小する業種。世界的に見ても、中小企業として、こういう場所で起業ができれば良いと言われるような、「スペース」と「環境作り」というのは北海道でしかできないのでは。
- ・国の予算を大胆にかけ、IT化を進めて自分の工場と北海道工場がネットワーク化し、それが世界とネットワークできるような夢のある工業団地作りをもっと考えるべき。
- ・過去、不況になると地方の方まで資金が回らなくなり撤退・倒産してしまう企業が多数あったが、当社は非常に室蘭市から手厚い支援を受けた。室蘭は「鉄の街」で、ものづくりに対する心構えはしっかりしており、皆、良く働いてくれる。しかし自発的に、自意識的に、発展していこうという意識が少なく、その点は難しい。このため、上の方からどんどん情報を提供することが必要。
- ・人を育てることはコストがかかる。その点の助成制度も横浜と比べると、段違いに多い。国内外展示会にも全額ではないが支援有り。全国のみならず、海外からも仕事が来るようになってきたところ。
- ・長い時間をかけて作り上げた技術を、もう少し世界に向け、どれだけ通用するかを自分達の手で確認しながらやっていく時代に入ったと感じる。そうした中小企業が国内に残り、また、海外とのネットワークも強くしながら、「自分達のものづくり」というものを作っていきべき。
- ・当社は、やっとシンガポールに事務所を構えたが、これから日本と海外とのネットワークを一層強くして、北海道の中でもものづくりをしていきたい。

- ・「北海道は魅力ある土地だ、夢がある。」とよく言われるが、現実には物凄く厳しいというのは、道産子が一番よくわかっている。
- ・産業立地上の強みを挙げてくれと言われても、「ありません。」と言うしかないのが現状。
- ・現実として、北海道は厳しい中で「何が、北海道が（他地域と）決定的に違うのか。」を掘り下げていって、そこに賭けるしかない。
- ・北海道の決定的な他の地域との差は、良しにつけ悪しきにつけロシアに非常に近いという点。しかし、それに賭けるだけの価値があるかという点、現実には非常に厳しい問題もある。
- ・現実の色々な問題は置いておいても、日本とロシアの関係からではなく、北海道とロシアの関係から組みあがっていくような、ちょっと別の切り口を持って、そこにどう賭けていくかを検討するべき。
- ・今日も主テーマは「人材」ということだが、カギはここにある。
- ・道内のビジネスでの決め手は、双方が親近感を持ち、互いの「人材の厚み」というものが醸成されること。遠回りの話かもしれないが、地に足のついた取り組みを両地域間でやれば、最終的には実る。
- ・ウラジオストク市に、つい最近、鳥取県が事務所を出し、今は鳥取県ブーム。北海道はというと、「北海道もあるけどね。」という程度。本当にドンといくのであれば、「北海道はロシアしかない。」と決断して、本当の意味での人のつながりを作っていくべき。

- ・ローカル企業が、これからどういう方向に進もうとしているのか、などの話を幾つか。
- ・過去、畑作・酪農・畜産は日本に無く、機械も全て欧米から来た。当社は、牽引機の後ろに付く作業機を製作。作業機は欧州機を元にして、大学等と協力しながら見真似で地域に合うように製作してきた。

- ・メンテや部品の安定供給等を含めて、当社の役割が蓄積された。十勝は米がないので、寒冷地作物を中心に畑作地帯が形成されてきた。そこに北海道特有の機械を作る当社が立地する理由がある。
- ・農業を主力産業としている地域は、一面弱いように見えても、内的循環、消費の割合で見ると比較的強い。他方、大手企業がほとんどない十勝の今後を考えると、やはり食品加工業がメイン。この食品加工産業の75%ほどは大手メーカーの工場と農協。中小の食品加工が育っていないのが問題。
- ・この裾野を広げるには、技術力と人材がポイント。今、帯広畜産大と組んだアグリバイオの人材育成事業や、中小企業家同友会や帯広市と組んだ雇用創出事業に取り組んでおり、農業に関連する食産業の振興を進めているが、これは時間がかかる。
- ・道央圏の産業政策と、道南、道東では自ずと違う。この点をしっかり認識して政策を進めなければならないし、我々地域の間人もそうした視点で物事を考えていかなければならない。
- ・北海道の場合、自然条件に恵まれ、広大な土地や豊富な水がある。但し、地理的条件で有利な点は、逆に不利になることもある。広大であるけれども、インフラの整備が希薄になっている。強い面と弱い面が相対している。企業や人口が集中していないから、インフラが希薄になっており、これからは人口減少が道東にとっての最大な問題となる。
- ・鉄鋼業からの観点で言えば、室蘭に立地した当時の強みは原料炭、鉄鉱石が現地にあったこと。今の強みは、大型船が入ることができる港湾施設があること。
- ・土地代の安さは、製鉄所構内を含め新たに進出する企業（二次加工者等）にとっては有利だが、既に立地している企業は必ずしも享受していない。むしろ国内での商売は輸送費が高くなり、土地の安さと相殺されている。マーケット対応が輸出であれば輸送費用はマイナスではなく、土地が安価であることが道内製造のメリットになり得る。
- ・立地のメリットは当初は原料とインフラがあったこと。現在のメリットは、良好な港があること。
- ・人材の面では、学卒では北海道大学や室蘭工業大学から優秀な技術者を確保できている。本州の工場と比べると、北海道の作業員は非常に真面目で熱心。人材的には非常に恵まれている。
- ・その中で課題としては、本州から大学卒の技術者を採用して室蘭に来たとしても、室蘭の寂しさが嫌だということで、辞めてしまう人もいる。そういう意味では、地域の活性化がないと優秀な人間が逃げてしまう。これは一つの悩みとなっている。
- ・2007年設立当初は、北海道にUターンで帰りたいと言う人が採用できたが一巡したのか、最近はなかなか集まらない。全国には、まだまだ北海道に戻りたいという優秀な人材はいるはず。
- ・当社が北海道に来て18年。先ほどメンバーから話があったが、人材が大変な魅力、優位性。
- ・ただ、人件費の優位性については、最初は良いが、今後、その人たちは高齢化。そうすると人件費の優位性というものは差が縮まってくる。一人当たりの生産性に優位性を持たないと競争には勝てないと認識。
- ・一つ苦労しているのは、メンバーの発言と同様、学卒の新卒の技術員の採用は苦戦。
- ・当社の札幌在の一番のメリットは大学の近くに会社を作ることが出来ること。ここが全てだと言っても過言ではない。IT企業である当社は、新卒者採用に注力。
- ・「一般論としては、もう、古いのではないか。」と先ほど言われたが、大きい土地が容易に確保出来、価格が安い。それから優秀な労働力。特に大卒の優秀な労働力の確保は容易であることが優位と認識。
- ・他方、高専の生徒の三分の二は現在でも外に出ている。そうした優秀な人材をいかに産業集積と結び付けていくかが課題。
- ・また、立地後のアフターケアは当然大事で、我々も（既進出の）道内100社以上訪問し、生活、産業活動上の問題等色々伺い、関係する機関・会議等の中で情報を繋いで極力速やかに問題を解決すべく努力しているところ。

- ・当市の売りは5項目。①新千歳空港に至近。工業団地が10箇所あるが5分～10分圏内。②環境省名水百選の水が利用可能。③優秀な人材。道央圏に立地故、優秀な人材と労働力が確保可能。④千歳科技大をはじめ、周辺に理工系大学が立地。⑤「住みよさランキング」で道内において千歳市が一位となっており立地環境が良。
- ・立地上の環境の強みを活かす方策は、一つは工業団地のパンフ。これは色々な項目を付け平易にして、比較表やデータ分析等を掲載。先ほどメンバーも仰せたが、「雪」も過去の公的機関のデータを載せており、千歳は最大積雪深が60cm程度ということで道央圏の中では少ない。
- ・既立地企業については、その企業の更なる発展のため、1社1社毎の「企画提案書」を我々側が作成し、その提案書を説明するという活動も行っているところ。
- ・地場の基幹産業である大手二社については、単独での自治体支援は出来ないところ。関連の企業誘致として、二次、三次メーカーを引っ張っていききたいとか、そういうところを出来るだけ協力。
- ・中小企業支援については、やはり情報を共有し、「かゆい所に手が届く」様なことを心掛けたい。
- ・室蘭に来て成功した企業の紹介という形での「企業誘致」は安心感があり、こうした点からも既存の企業を大切にしていきたい。
- ・室工大の存在が大。室蘭は面積80km²で大型工場の進出は不可。よって、高付加価値・高度部材企業を誘致するには、室工大の力が必要。
- ・また、過去、室工大の先生と一緒に企業誘致を実施。先方に非常にインパクトがあった。誘致が失敗しても、例えば、大学と先方で共同研究を獲得出来れば、それで是。共同研究と誘致の両方が出来れば、なお是。そうした取り組みを今後もやりたい。また、「高付加価値」の誘致として、開発系のラボがある。工場を持ってくるは困難だが、サブ・ラボ的な開発系を持ってくる。そうした努力を続けたい。
- ・既存の施策では、企業の要望に全て応えられないのも現実だが、企業との信頼関係の維持に努力。
- ・北海道において「何々」を行う優位性というのは、「ものづくり」を、観光ビジネスや農業、情報関連サービスなどに置き換えて考えた場合には、結構色々な展開があると思う。しかし、「ものづくり」を、行う優位性については、なかなか北海道では難しい面があると認識。
- ・講演等では北海道の人材は高評価だったが、製造業については、日本全体の産業分布でいっても、「北海道は日本の中でも集積の少ない地域である」という問題意識を持ち、北海道のものづくりを強化するためにどうすれば良いのか、ある意味「割り切って」議論をすることが必要と感じた。
- ・先程、メンバー（自治体）から地域連携について期待の言葉があったが全く同感。
- ・北海道で行っている様な基盤技術に関するものづくりについては、対応できるような大学の研究者が非常に減少していることが問題。公設の試験機関の人材育成機能が期待されている。
- ・自動車産業に触れると、九州では完成車を作っており1,000社との部品取引、部品調達率60%である。これに対して北海道では部品取引12社、部品調達率は7%である。したがって、北海道には九州と全く違うストーリーが必要である。
- ・北海道では特色のある部品産業を目指すべきだというのが私見。そのために技術開発型の人材が必要となり、それを強化するような対策が必要。

○人材等に対する要望及び対応

- ・行政への要望は、行政の人員は数多くいるので、もっと東京など外へ出て行って北海道の中で北海道のことを考えるのではなく、外に出て北海道を見ることで色々なことがわかると思う。
- ・企業をもっと呼びたいなら、「呼ぶにはどうするのだ？」というような討議をもっとしていくべき。お金がかかるが、「無いからだめだ。」とならず、「それを良くしてやろう。」という環境作りが大切。

- ・北海道を語るのであれば、「北海道ならではの固有のものは何なのか。」それを基本に話をすべき。やはり人がカギになるので、行政への要望は、人的交流や友好醸成の仕組みをどうするかである。
- ・農業にとっては農業地を減らさない、遊休地を増やさないことが、最大の問題。そうすれば、単価が下がっても生産力は維持できる。一番の問題は、高等教育機関を含めて、食品の安全衛生や技術者・技能者の人材育成をきっちりやっていないかなくてはならない。
- ・人材は優秀。協会の企業で働いている人達は、関東以西の製鉄所の人材と比べて遙かに優秀。
- ・行政への要望は、室蘭も輸出に注力するために中・韓への直行ルートを整備して欲しい。
- ・また、中・韓と更に輸出入の商売を推進する際に通訳の問題があり、公的な通訳養成所等があると良い。
- ・弱みの一つは気候で製鉄所の水温管理が技術的に難しいし、出荷が荒天でチャンスロスになる事も冬場に多い。また、室蘭港は夜中に入港が出来ない。この気候の季節変動を、例えば、港の24時間化⇨平準化で補いたい。ぜひ更に支援して欲しい。
- ・札幌への一極集中をもっと各地へ分散し平準化していかないと、北海道の活性化は得られないのではないかと。
- ・行政への要望として、例えば東京、名古屋あたりの「北海道出身者」に知らしめる策があると良い。
- ・行政への要望として、住む町の魅力（医療・学校・買い物⇨生活インフラ等）に一層注力頂きたい。
- ・新卒募集すると400～500人は来て、その中で5～10人採用故、人材面では非常に有利。
- ・当社の場合は平均で7～8年勤務。終身雇用的なものは、ある程度維持すべきと感じる。
- ・IT関連でもう一点。行政への要望は通信インフラ整備。光回線の一層の高速化をお願いしたい。
- ・道の人材育成の施策は、どちらかというと文科省頼りで、製造業とはあまり縁のない形であった。今後は、企業の人材確保に我々も出来る限り協力したい。
- ・経産省・文科省の「北の匠」事業。（H20年から苫小牧、室蘭の工高生が企業実習を通じて、若手ものづくり人材育成するという取り組み）苫小牧市も、トヨタ、アイシン等の協力を頂き、成果大。H22年までと聞いている。是非継続頂きたい。
- ・「ものづくり」人材の育成の観点からだけ話すと、ものづくりでも、①「加工組立型の大量生産型」②「受注型・技術開発型」があり、内容が違う。
- ・人材も、①であれば、まずテクニシャン、優秀なオペレーター、そして、保全技能士、その先にマイスター的な人材が必要。②であれば、むしろ技術開発力を持つエンジニアが必要であり、開発能力を持ったエンジニアリングサイエンティストといった人材を育てなければいけない。
- ・大学新卒で、その能力を持った人材を育成するのは大学の使命だが、人材育成の中に、学生（＝新規採用の人材）の人材育成とともに、企業内の人材育成および公設試験研究機関の人材育成を是非念頭に入れてほしい。道工試、函館工技センター等は優秀な人材がいるので、他の公設試でも優秀な人材が育つよう、自治体の理解、尽力をお願いしたい。

(以 上)